

ハムシ捕る 水本 光

・三月の雨の夕べにアンソロジー開いてさ
がすコーヒーの歌 伊井かずひろ

戦地に取材した加古作、戦後七十年「忘れられた無数の横井さん小野田さん」を忘れてはならない。武藤作、「猫の乗り物」という洒落た表現にひかれる。佐佐木朋子作、ニッポニテスは北海道の白亜紀層に産する異常巻きアンモナイト。頼綱さんも化石と隕石、定綱さんは蜘蛛の目玉を詠む、面白い。水本作、生きるために淡々と「命」を潰す覚悟のすごさ。伊井作、高田渡のイノダコーヒーが浮かんで懐かしすぎる。

清水あかね

・人生の放課後といふ贈りものうつとりと
して老いの木洩れ日 青木 信

・サラ サミラ さくら 友の名を呼ぶこ
糸が我の人生を美しくせり小川真理子

・わが日々にあかりの如き友のいて今日菜
の花の絵手紙とどく 木多川 夏
・白梅の光まとひて咲きはじむ叶ひたる夢
を大切にせよ 高橋 淑子

・金色の新芽緑に脱ぎ更へし樟は皐月の風

の語り部 岡本 尚真

多くの素敵な歌を五首に絞るのは難しい。今年紙上で出会った作品からのみ選ぶこととした。青木作、読んでいるこちらもうっとりとしてしまいう時間を描く。小川作、各国のサ音の友の名前の美しさ。木多川作、「あかりの如き友」の比喩が秀逸。高橋作、叶わぬものばかりを追いがちな自分は襟を正した。岡本作、「樟は皐月の風の語り部」の字余りのフレーズに心惹かれた。

原尚美

・しゃくなげを愛し短歌を鈴鹿嶺を愛し石
薬師を愛したる人 佐佐木幸綱

・切なさは川面に溶ける夕茜ただ生かされ
てこの星におり 笹本 碧

・親族が集ふ場にひて妻のないわれは薄墨
めいて座れり 高山 邦男

・日本語は違ふ気がしてアリゾナの鹿の死
骸に手を合はせをり 佐佐木頼綱
・「心ってどういいうカタチ」幼子に我は入
道雲を指さす 佐佐木定綱

今年愛誦していた短歌から五首をひいた。
幸綱先生作、祖父である信綱の本質を捉え

た懐の深い大きな一首。立ち姿が美しい。

笹本作、みずみずしい詩的魅力溢れる一首。絵本の一頁のよう。高山作、「薄墨めいて」がうまい。薄い程に作者の存在が浮かび上がってくる不思議。頼綱作、大胆かつ繊細な一首。短歌でしか伝えられない現場感。取材感覚の鋭さ。定綱作、心と入道雲を結びつけた跳躍力が魅力。指さす、がいい。

奥田亡羊

・自爆テロはいま カミカゼ と呼ばれをり若
く死にゆくことのみ似たる松本 実穂

・話好きの人の伴侶の寡黙さよ無花果熟れ
る半島の南 鄭 賢鮮

・たんぼの首だけ摘みて帰り来る「たん
ぼぼ酒」は自らのため 山下 雅人

・裂かれつつ並べ干されしトビウヲにあふ
るあたたかき明日と風 佐佐木頼綱

・いちまいの落葉が乾き始めをり水をなく
した水たまりの中 大塚 泰子
松本作、自爆テロが神風と呼ばれることへの抵抗感から、さらに道具として死へ追いやられた若者へ眼を向け、戦争そのものに対する怒りへ転じている。鄭作は歌の陰